鉄製工具・農具副葬の背景

—丹後・中丹波地域を中心に—

鍋田　勇

1　はじめに

小論は、墳墓及び古墳から出土する鉄製農工具を対象として考察を行うものである。

この考察の出発点は、私市円山古墳[1]の第3主体部をどのように評価するべきかという問題意識にある。私市円山古墳では、豊富な副葬品をもつ第1・2主体部に目が奪われがちであり、鉄製農工具と鉄鏃を副葬する第3主体部については、十分な理解ができないままでいた。小論の関心はこの点のみに限らないが、以下の作業を通じて、最後に私市円山古墳の第3主体部の評価を行い、私市円山古墳の概要報告で行い得なかった考察の一部として、その責を果たすことにしたい。

2　研究史と問題の所在

副葬された鉄製農工具には、副葬という行為を支える三つの背景が存在すると考えられる。まず、副葬を可能とした社会的背景と、それを副葬の対象とした思想的背景とがあげられる。前者は、その出現から普及・保有状態に関わる問題であり、後者は、鉄製農工具に向けられた精神面と諸儀礼に関わる問題といえる。さらに、古墳を政治的産物とみなす立場からは、副葬品もまた同様の性格をもつといえ、単に両者の問題にとどまらず、政治的情勢を反映し、その意味で政治的背景を有しているといえる。

さて、鉄製農工具に対する従来の研究では、形態論や機能論を基礎としながら、鉄製工具・鉄製農具が生産、特に農耕生産の発展段階で果たした役割の解明に主眼が置かれている。これは、それぞれのものが所有する本質的機能を対象として、社会的・歴史的意義の解明を行なうものといえ、上記の視点からみると社会的背景を構成するものである。この分野にはすぐれた業績[2]が多く、また、小論での直接的な関心からややずれるため、先行の研究成果を学びながら論を進めていく。

思想的背景については、実証の難しさから言及されることが少ないが、鉄製農工具を被葬者の死から埋葬に至るまでの諸祭祀の実施に必要な建築などに使用した道具とする小林説[3]、古墳祭式の準備・実習過程でもっぱら使用されたものをそれぞれの役割が終了した後

埋納されたとする春成説[4]にその一面を見いだすことができる。

これに対し、原島礼二氏は、成立期古墳の副葬品を被葬者の霊魂が特定の働きをする神あるいは霊魂の依代として役立つための呪具としたうえで、鉄製農具については、農工生産における役割と支配集団によるその独占に基づく呪具とし、政治的背景にまで踏み込んだ見解[5]を示した。また、寺沢知子氏は、鉄製農工具に鏡と同様の出土状況がみられること、鉄製農工具のセット関係と出土状況が古墳において画一化した儀礼の一部を構成していること等によって小林説を否定した。さらに、特に前期古墳について農工具を使用した儀礼が農耕を含めた生産の所作儀礼を表し、その儀礼の執行権を政治的支配権として畿内政権が利用したとの見解を提示し、畿内政権と地域首長間の結合関係を反映するものとして原島説以上にその政治的背景を積極的に評価した[6]。

寺沢氏の実証的方法論から示された見解には従うべきところが多いが、なお疑問の余地が存在する。ひとつは、首長クラスの古墳に対して示された鉄製農工具の意味する儀礼を小古墳に対しても同じように当てはめることが可能か、さらに鉄製工具と鉄製農具のもつ本質的機能差、普及と保有状態の差が副葬に際して反映されないのかという点である。

そこで、小論では、副葬品としての鉄製農工具を対象とし、主としてその思想的・政治的背景に焦点をあて考察を行う。なお、寺沢論文と異なる観点として、第1に一地域内の鉄製農工具出土古墳を包括的に取り扱う。ケーススタディとして丹後・中丹波地域を取り上げる。第2に、鉄製工具と鉄製農具の出現時期差と本質的機能差を積極的に評価することによって新たな見解を提示したい。

3　鉄製農工具副葬の墳墓と古墳

丹波北部地域では、近年に急増した発掘調査によって、多数の埋葬施設(埋納土壙を含む)で鉄製農工具の出土が確認されている。各墳墓及び古墳の概要は第1表にゆずり、まず副葬品としての鉄製農工具のもつ全体的な特徴を抽出する。

副葬の時期　丹後・中丹波地域とも、弥生時代後期～古墳時代後期の長期間にわたり副葬が行われている。丹後で最も古い資料としては大山墳墓群、中丹波では論田・大道を含む豊富谷丘陵遺跡をあげることができる。ともに弥生時代の方形台状墓から副葬の始まる点が注意される。古墳時代以降についても大局的にみると各時期を通じて副葬が行われ、特に横穴式石室採用以降でも継続して副葬が行われている点にも注意しておきたい。

鉄製農工具の副葬は、一過性のものではなく、副葬の対象として長期にわたる思想的基盤を有していたことが確認できる。

副葬の階層性　鉄製農工具を副葬する墳墓と古墳について、墳丘の形態・規模を比較し

第1表　鉄製農工具出土墳墓・古墳一覧表

No	古墳名	所在地	墳形	規模	構造	鍬	鎌	斧	鉇	刀子	鑿	錐	その他の副葬品	類型	文献
1	崩谷1	久美浜町	円	17	横穴式石室			1					金環・轡・鐙・砥石・刀・鏃	—	
2	アバ田2	久美浜町	円	12	横穴式石室			3		1			刀・鏃・馬具・玉・紡錘車	—	
3	畑大塚2	久美浜町	円	10	横穴式石室		1	1					金環・銀環・刀・鏃	—	
4	堀坂神社1	久美浜町	円	?	横穴式石室			○					金環・玉	—	
5	くらがり2	網野町	円	15	竪穴式石室			1		1			鏃		
6	離山	網野町	円	?	竪穴式石室			○							
7	妹	網野町	円	30	割竹型木棺			○					剣・不明鉄器		
8	白滝	網野町	円	?	横穴式石室	1				1			鏃	—	
9	相谷1	網野町	円	?	横穴式石室		○						玉・刀・馬具・砥石	—	
10	大山7号墓	丹後町	方	13	箱形木棺				1					AⅠ	1
11	大山(周1)	丹後町	—	—	箱形木棺				1					AⅢ	1
12	大山(周4)	丹後町	—	—	箱形木棺					1				AⅠ	1
13	大山(周9)	丹後町	—	—	箱形木棺				1				玉	AⅠ	1
14	大山(周12)	丹後町	—	—	箱形木棺				1					AⅠ	1
15	大山(周17)	丹後町	—	—	箱形木棺				2				銅鏃	AⅢ	1
16	大山(周18)	丹後町	—	—	箱形木棺				1				鏃	AⅠ	1
17	大山(周27)	丹後町	—	—	箱形木棺				1					AⅠ	1
18	大山9(2)	丹後町	円	17	箱形木棺				1	2				AⅠ	1
19	大山10(1)	丹後町	円	19	竪穴式石室				1	1			剣	AⅠ	1
20	産土山	丹後町	円	56	長持型石棺				8	3			鏡・玉・剣・刀・木弓・鏃・槍	AⅢ	2
21	馬場ノ内	丹後町	円?	?	長持形石棺	1		1					玉・鋲留金具		
22	大成7	丹後町	円	16	横穴式石室		1			2			金環・玉・刀・鏃	—	
23	高山3	丹後町	円	15	横穴式石室			1	1				刀・刀装具・鏃・馬具・留金具・玉	—	
24	中尾	伊根町	円	13	横穴式石室			1		1			帯金具・釘	—	
25	太田4号墓(3)	弥栄町	円	16	箱形木棺			1		1				AⅢ	
26	普甲3(4)	弥栄町	方	9	箱形木棺			1	1				剣	AⅢ	3
27	普甲6	弥栄町	方	9	割竹形木棺				1				剣・鏃・櫛	AⅢ	3
28	宮の森3(2)	弥栄町	方	14	組合式木棺				2				釘	AⅡ	
29	ゲンギョウ4	弥栄町	方	8	木棺				1				剣	AⅠ	4
30	ゲンギョウ6(1)	弥栄町	方	13	木棺			1	1				剣・不明鉄器	AⅠ	4
31	ゲンギョウ7(2)	弥栄町	方	12	木棺			1						AⅠ	4
32	新ケ尾東10	弥栄町	円	11	竪穴系横口		2			3	1		金環・刀・鏃・辻金具	—	
33	カジヤ(1)	峰山町	円	73	竪穴式石室	1			5	1	1		鏡・石釧・鍬形石・筒形銅器・剣	BⅢ	5
34	カジヤ(3)	峰山町	円	73	割竹形木棺					1			剣・刀・玉	AⅡ	5
35	帯城7号墓(周1)	大宮町	—	—	木棺?			1						AⅠ	6
36	帯城11号墓(南4)	大宮町	方	—	箱形木棺				1	1			剣	AⅠ	6
37	大内1	大宮町	円	25	竪穴式石室		2	1	1	1			砥石・剣・鏃	BⅠ	7
38	大谷	大宮町	円	26	箱形石棺			1		1			鏡・玉・剣	AⅠ	8
39	小池3	大宮町	方	12	箱形木棺			1					砥石	?	9
40	小池8	大宮町	円	10	木棺		1			1			刀・鏃	BⅠ?	9
41	三本松	大宮町	円	?	横穴式石室			○		○			刀・鏃	—	
42	西外3	大宮町	円	?	?			○						—	
43	日の内(1)	岩滝町	円?	25	箱形木棺				1		1		鏡・玉・剣	AⅡ	10
44	千原2	岩滝町	方	18	横穴式石室		1						金環・銀環・刀	—	
45	霧ケ鼻1(1)	野田川町	方	18	箱形木棺				1					AⅢ	11
46	霧ケ鼻2(1)	野田川町	方	11	箱形木棺				1					AⅠ	11
47	霧ケ鼻2(2)	野田川町	方	11	箱形木棺					1				AⅠ	11
48	霧ケ鼻3(1)	野田川町	方	7	木棺				1	1			剣・鏃	AⅠ	11
49	霧ケ鼻5(5)	野田川町	方	12	土器棺墓				1					AⅠ?	11
50	内和田5(2)	加悦町	方	15	木棺				2					AⅠ	12
51	内和田5(3)	加悦町	方	15	木棺				1					AⅠ	12
52	内和田5(6)	加悦町	方	15	木棺				1					AⅠ	12
53	内和田5(8)	加悦町	方	15	木棺			1						AⅠ	12
54	内和田5(14)	加悦町	方	15	土壙墓				1					AⅠ?	12
55	蛭子山1	加悦町	前方後円	145	竪穴式石室			4					鏡・刀・剣・槍・鏃	AⅢ	13・14
56	作山1	加悦町	造出付円	36	組合式石棺		1	2	1	4			鏡・石釧・玉・剣・槍・鏃	BⅡ	13
57	作山5	加悦町	方	13	割竹形木棺		2	1					石釧・玉	BⅠ	15
58	作山10号墓	加悦町	—	—	木棺				1				管玉・玉	AⅠ	15
59	愛宕山3(1)	加悦町	円	27	組合式石棺					1			玉	AⅠ	16
60	愛宕山3(2)	加悦町	円	27	箱式石棺				1	1			刀	AⅠ	16

No	古墳名	所在地	墳形	規模	構造	鍬	鎌	斧	鉇	刀子	鑿	錐	その他の副葬品	類型	文献
61	愛宕山3(3)	加悦町	円	27	組合式木棺				1					AⅡ?	16
62	愛宕山9(2)	加悦町			組合式木棺						1		剣・鏃・砥石	AⅡ?	
63	鴨谷1(1)	加悦町	円	54	割竹形木棺	1				1			刀・鏃	—	
64	鴨谷3(北)	加悦町	方	10	組合式木棺		1							AⅠ?	
65	鴨谷3(南)	加悦町	方	10	組合式木棺		1							AⅠ?	
66	小虫1(1)	加悦町	方	13	組合式木棺		7	3		6			鉾・鏃・櫛	BⅡ	17
67	小虫1(2)	加悦町	方	13	割竹形木棺		1			2			櫛・鏃	BⅠ	17
68	岸外4	加悦町	方	?	箱形木棺	1				2			剣・鏃	AⅠ?	
69	切山	舞鶴市	円	?	箱形石棺			1	1				剣・鏃・銅鏃		
70	千田2	舞鶴市	円	14	横穴式石室					○	○		金環・玉・鏃	—	
71	妙見山1	舞鶴市	円	30	横穴式石室			○		○			金環・管玉・刀・鏃	—	
72	谷尾谷3	福知山市	方	11	木棺				1					AⅠ	18
73	谷尾谷1(2)	福知山市	円	14	木棺				5				鏃	AⅠ	18
74	論田2(3)	福知山市	方	11	木棺				1					AⅠ	18
75	論田6	福知山市	方	12	木棺	1								CⅠ	18
76	論田13	福知山市	方	14	木棺			3	2	1			刀・鏃・竪櫛	AⅠ	18
77	狸谷11	福知山市	方	19	?		1						玉	—	18
78	セイゴ10	福知山市	方	18	木棺	1								CⅠ	18
79	大道4(4)	福知山市	方	11	箱形木棺				1						18
80	宝蔵山4(1)	福知山市	方	20	箱形木棺				1				鏃	AⅠ?	19
81	宝蔵山4(4)	福知山市	方	20	円筒棺			1		1			槍先・鏃	AⅠ	19
82	ヌクモ1	福知山市	円?	25	割竹形木棺			1	1	2			剣・刀・鉾	AⅠ	20
83	狐塚	福知山市	方	18	割竹形木棺			1	1				剣・鏃	AⅡ?	
84	寺ノ段3	福知山市	円	12	木棺				2	1		1	鏃	AⅠ?	21
85	広峯8(土壙)	福知山市	(土壙)	—	—			2			3	1	砥石	—	21
86	広峯15	福知山市	前方後円	40	木棺			1	1				剣・管玉・鏡・槍	AⅡ	21
87	八ヶ谷(3)	福知山市			組合式石棺					6			鏡・琴柱形石製品・玉・刀	AⅠ	22
88	後青寺(1)	福知山市	方	?	箱形木棺		1	1		3			鏃		
89	城ノ尾	福知山市	円	12	横穴式石室	1				4			金環・銀環・刀・鏃	—	
90	私市円山(2)	綾部市	造出付円	81	木棺	4	5	7	2	7	2		鏡・玉・短甲・刀・鏃・竪櫛	BⅡ	23
91	私市円山(3)	綾部市	造出付円	81	木棺?	2	2	1	1	1			鏃	BⅠ	23
92	福垣北1	綾部市	円	10	木棺		1	1					鏃	BⅠ?	
93	福垣北2	綾部市	方	15	組合式木棺			1					鏃・剣	AⅡ?	
94	福垣北6	綾部市	?	?	木棺		1						刀・鏃		
95	三宅1(南槨)	綾部市	円	15	粘土槨	1	1	4	3	1	2		鏡・短甲・刀・金銅馬具	BⅠ	24
96	三宅2	綾部市	円	?	木棺?	1		1		1			刀・鏃	—	24
97	沢3	綾部市	前方後円	46	礫床?			1					頚甲・三環鈴・f字形鏡板	—	
98	田坂野4(北)	綾部市	円	15	木棺	1			1	2			鏃		
99	田坂野4(南)	綾部市	円	15	箱形木棺			1		1			鏃		
100	以久田野30	綾部市	円	13	粘土槨	○	○	○		○			剣・槍		
101	以久田野46	綾部市	円	?	木棺?	○		○			○		剣・刀・釘		
102	以久田野49	綾部市	円	10	横穴式石室				○		○		金環・刀・鏃・鉤・馬具	—	
103	栗ヶ丘3(1)	綾部市	円	13	箱形木棺	1							鏃	CⅢ	
104	栗ヶ丘3(2)	綾部市	円	13	箱形木棺		1	1					鏃	BⅠ?	
105	栗ヶ丘3(3)	綾部市	円	13	箱形木棺					3			鏃	AⅠ?	
106	栗ヶ丘4(2)	綾部市	円	—	土壙		1			1				—	
107	栗ヶ丘11(1)	綾部市	円	11	箱形木棺		1	1		1			鏃	BⅠ?	
108	栗ヶ丘11(2)	綾部市			箱形木棺			1					鏃	AⅠ	
109	桐ヶ迫	綾部市	円	18	木棺?	1								—	
110	中山(3)	綾部市	円	20	箱形木棺		1			2			玉	BⅠ	
111	平山	綾部市	円	18	箱形木棺		1		1	3			刀・鏃・轡・玉	BⅠ?	
112	前田2	綾部市	円	10	箱形木棺	○				○			鏃		
113	高谷3	綾部市	円	18	横穴式石室	3				6			金環・管玉・刀・鏃・帯金具	—	
114	高谷4	綾部市	円	15	横穴式石室	○		○					金環・玉・刀・鏃	—	
115	高谷10	綾部市	円	15	横穴式石室			○		○			金環・玉・刀・鏃	—	
116	八塚1	綾部市	円	16	木棺?	1		1					鏃	—	
117	八塚2	綾部市	円	14	木棺		1			1			玉	—	
118	平2	綾部市	円	19	粘土槨			○					刀		
119	中塚	綾部市	円	15		1				1					

(古墳名:数字—古墳番号　(　)—主体部番号，鍬～錐:○—個数不明，類型:Ⅲ′—棺上)

た場合、地山削り出しによる10m程度の円・方墳から大型前方後円墳まで多岐にわたる内容を有することが注目される。丹後では、古墳時代前期後半の作山10号墓と蛭子山1号墳間、中丹波では古墳時代中期中頃の福垣北6号墳と私市円山古墳間にみられる階層差を典型的な例としてあげることができる。副葬量の多寡はあるにせよ、およそ古墳を構築することのできた階層のなかでは、底辺から頂点までが鉄製農工具を副葬の対象としており、首長クラスの特定階層のみに限定される副葬品ではないことが注意されよう。

鉄製農工具の副葬は、特定階層のみではなく、幅広い階層に浸透した思想的基盤を有していたことが明らかである。

では、なぜ鉄製農工具がこれほど時間的・階層的に幅広い支持を得るに至ったのかが、新たな問題として表出する。この点に留意しながら考察を進める。

4　鉄製工具・農具の組合せと出土状況

前節では、鉄製工具と鉄製農具を一括した資料として取り扱った。しばしば鉄製農工具と呼称されるのが、古墳からの出土状況に起因していることは容易に想像できる。特に前期～中期古墳にみられる工具と農具の混在する出土状況は、両者に対する副葬思想に大きな差のなかったことを示しているといえる。しかし、工具と農具を全く同一視してよいものであろうか。両者のもつ本質的な機能は明らかに異なり、鉄製工具が鉄製農具に先行して出現することも明らかにされている[7]。したがって以下では、鉄製工具と鉄製農具を分離し、検討を進める。具体的な方法としては、寺沢氏の示された「セット関係」と「出土状況」を重視する立場をとりたい[8]。なお、以下の作業では、出土状況の不明なものおよび横穴式石室採用以後の古墳は対象から除外している[9]。

まず、セット関係では、鉄製工具と農具との組合わせによって、鉄製工具のみを副葬するもの(A類)、鉄製工具と農具を副葬するもの(B類)、鉄製農具のみを副葬するもの(C類)の3パターンに分類することができる。

出土状況では、副葬の位置が、その副葬品に対する意識・思想に反映されているという基本的理解にたち、遺体との隔絶の状況によって分類を行った。棺内に副葬するもの(I類)、棺に仕切りを設け、木口との間の空間に副葬するもの(Ⅱ類、以下棺内副室と呼称する)、棺外に副葬するもの(Ⅲ類)の3パターンに分類する。

これら2つの分類を組合せて整理したのが、第2表である。

鉄製工具と鉄製農具の組合せから出土状況を検証すると、鉄製工具のみの場合は、棺内への副葬が数のうえでは圧倒的多数を占め、鉄製工具＋鉄製農具の場合は、棺内と棺内副室への副葬にほぼ2分される。鉄製農具のみの副葬では棺内に限られる。これらのことは、

第２表　鉄製工具・農具の組み合せと出土状況

	Ⅰ　棺　内		Ⅱ棺内副室	Ⅲ 棺 外
A類(工具のみ)	大山７号墓 大山(周４) 大山(周９) 大山(周12) 大山(周18) 大山(周27) 霧ヶ鼻２(１) 霧ヶ鼻２(２) 霧ヶ鼻３(１) 内和田５(２) 内和田５(３) 内和田５(６) 内和田５(８)	帯城11(４) 帯城７(周１) 作山10号墓 ゲンギョウの山４ ゲンギョウの山６(１) ゲンギョウの山７(２) 大山９(２) 大山10(１) 愛宕山３(１) 愛宕山３(２) 小池８ 大谷	カジヤ(３) 日ノ内(１)	蛭子山１ 産土山
	論田２(３) 大道４(１) 谷尾谷１(２) 谷尾谷３	宝蔵山４(４) 寺ノ段３ ヌクモ１(１)	広峯15	
B類(工具＋農具)	作山５ 小虫１(２)	大内１	作山１ 小虫１(１)	カジヤ(１)
	私市円山(３) 三宅１(南榔)		私市円山(２)	
C類(農具のみ)				
	セイゴ10	論田６		

(枠内点線上段：丹後、下段：中丹波)

鉄製工具と鉄製農具の組合せ及びその出土状況に密接な関係のあることを示している。したがって、数的に多数を示す次の３グループをまず基本型として認識することにしたい。すなわち、鉄製工具を棺内に副葬する(ＡⅠ型)、鉄製工具と鉄製農具を棺内に副葬する(BI型)、鉄製工具と鉄製農具を棺内副室に副葬する(ＢⅡ型)である。それ以外については、後述する理由によりカジヤ古墳第１主体(BⅢ型)を除き、これらの基本型の亜流もしくは例外として取り扱うものとする。

次に、それぞれの基本型に含まれる墳墓と古墳の特徴を検討する。

ＡⅠ型の最大の特徴としては、方形台状墓とその系譜をひく古墳群が主流である点が指摘できる。大山墳墓群、帯城墳墓群、論田・大道・谷尾谷を含めた豊富谷丘陵遺跡、内和田古墳群、霧ケ鼻古墳群では、弥生時代後期から古墳時代前期に属する方形台状墓とそれに連なる古墳内において、特に鉇を主体とする鉄製工具の副葬がみられる。古墳時代中期では、普甲古墳群、ゲンギョウの山古墳群、小池古墳群といった小規模な古墳から構成される群集墳内で、同様に鉇を主体とする鉄製工具副葬がみられる。これらの古墳群では、総体としてわずかな鉄製品を中心とした副葬品がみられるのみであり、質・量ともに貧弱な内容しかもたないが、その中にあっても鉄製工具が含まれている点を重視する必要があ

るだろう。ただし、作山10号墓は、蛭子山１号墳と作山古墳群内での理解が必要であり、上述の台状墓系譜とは区別するべきかもしれない[10]。なお大谷古墳・ヌクモ１号墳は、ＡＩ型の中では特筆される内容であるが、ともに台状墓の系譜をひく古墳として扱う。

ＡＩ型は、個々にみれば小規模の墳墓・古墳でしかないが、総量としては出土量全体の大部分を占めていることにも注目しておきたい。

ＢＩ型には、５例が含まれるが、バラエティに富む内容を有している。ただし、いずれもＡＩ型にみられたような群集する台状墓系譜の古墳とは明らかに異なっており、小首長墓的内容を有している。時期的には、古墳時代前期後半より遡るものは含まれていない。

ＢⅡ型は、３例とはいえ中丹波の私市円山古墳第２主体部、丹後の作山１号墳といった首長墓クラスの古墳が含まれていることに特徴がある。また、３例とも同一古墳群内の他の古墳もしくは同一墳丘内の他の主体部にＢＩ型が存在し、いずれもそれらより内容的に優位を占めている点が注意される。時期的には、ＢＩ型と同じく古墳時代前期後半より遡るものは含まれていない。

さて、上記の３基本型以外の古墳のうち、その重要性からカジヤ古墳(ＢⅢ型)と蛭子山１号墳(ＡⅢ型)を取り上げ検討したい。両古墳とも丹後地域における前期後半の首長墓であり、カジヤ古墳は、埋葬施設と副葬品において、蛭子山１号墳は墳形と規模において畿

第１図　第２主体部鉄製農工具出土状況

内との密接な関係を示している[11]。特にカジヤ古墳は、丹波北部地域では数少ない竪穴式石室を埋葬施設としている点でひとつの基本型として認識したい。蛭子山1号墳は、現在知られるかぎり鉄製農具の出土はないが、保有の可能性を残しているのでBⅢ型の余地がある[12]。ただし中心主体に舟形石棺を採用するなどその特異性になお留意が必要ながら、ここでは棺外への副葬を重視してBⅢ型の亜流としておく。

以上のことから、鉄製農工具の組合せと出土状況によって類型化した4つの基本型は古墳のもつその他の属性とも密接なつながりを有していることが理解できる。この点を整理し、重要な事柄を絞り込むと以下に集約される。

①鉄製農工具の副葬は、まず鉄製工具を弥生時代後期の方形台状墓に副葬するのを始まりとし、その際、鉄製工具は棺内に収めるのを原則とする(AⅠ型)。

この時点で鉄製農具の副葬がみられないことは、鉄製農具そのものがまだ普及していなかったとするのが自然な解釈であろう。鉄製工具の出現は、先進地である北九州では、弥生時代前期まで遡り、鉄製農具は、中期後葉～後期初頭と遅れる[13]。丹後・中丹波で鉄製工具の副葬が始まる時期には両者とも存在するといえるが、普及に要する時間を考え、当地域でも同様の出現時間差をみるべきであろう。重要なのは、先行して普及した鉄製工具の方が副葬の社会的背景として先に整い、鉄製農具の出現以前の段階で鉄製工具を副葬する思想的背景が成立していたと考えられる点である。

②鉄製農具は、鉄製工具の副葬から約1世紀遅れた古墳時代前期後半以降に副葬が始まり、棺内と棺内副室および棺外のそれぞれに副葬するケースがある(BⅠ・BⅡ・BⅢ型)。首長墓クラスの古墳に副葬されるのを特徴とする。

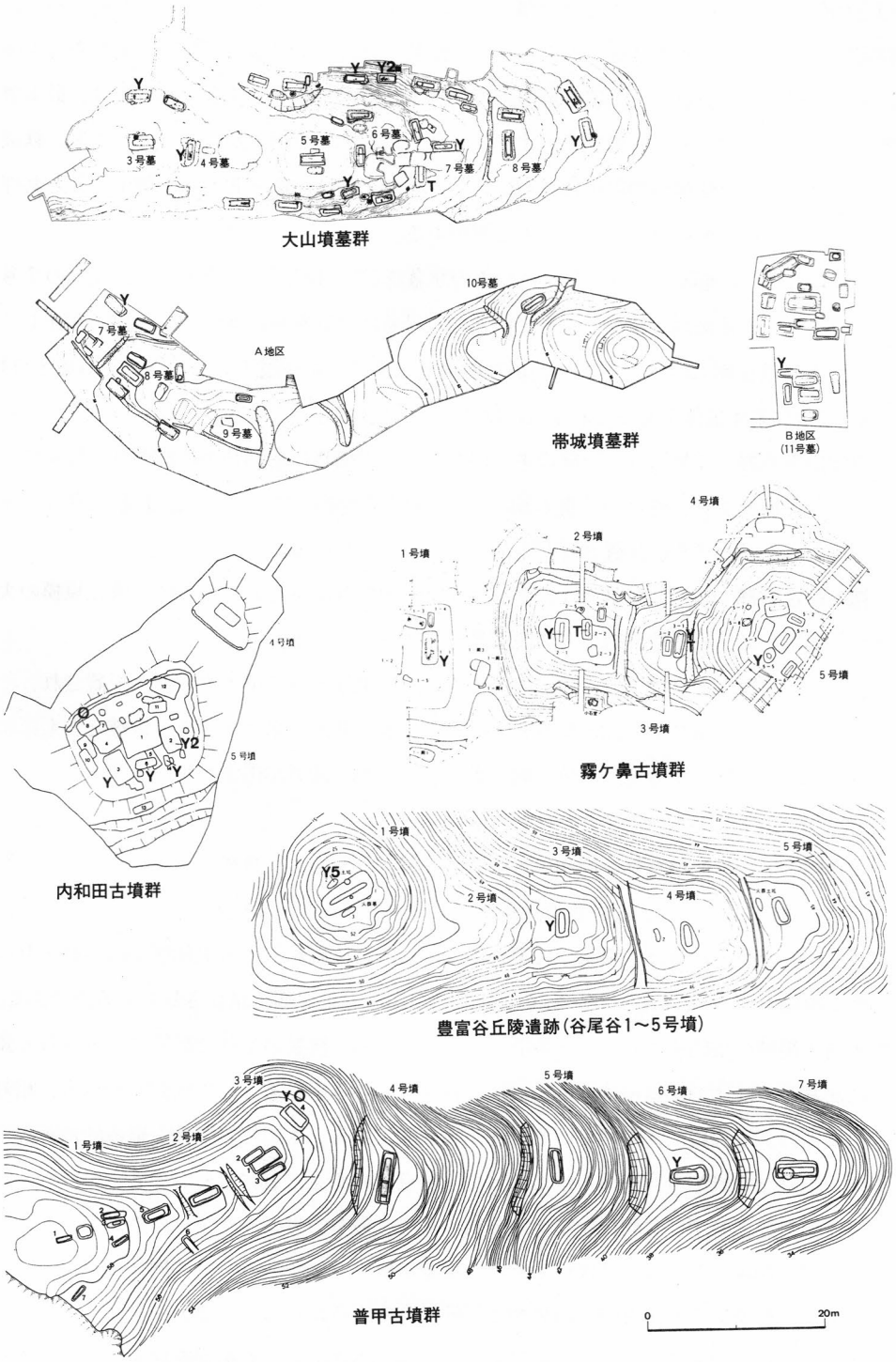
ここで重要な点は、棺外もしくは棺内副室への副葬が、鉄製農具副葬と密接なつながりを有するのではないかと想起できることであろう。少なくとも、先に成立していた棺内に工具を副葬するという思想に対して、棺外もしくは棺内副室に鉄製工具と農具を副葬するという副葬形態は異質なものとして取り扱うことが妥当である。つまり、鉄製農工具の副葬形態は、古墳の規模・内容と出現の時期差によって、2グループに大別可能である。

次節以降では、それぞれについてさらに検討を行う。

5　鉄製工具副葬の被葬者像と思想的背景

前節で問題とした鉄製工具を棺内に副葬するAⅠ型の墳墓・古墳を俎上にあげ、その被葬者像の検討を行いたい。具体的には、大山墳墓群・帯城墳墓群・内和田古墳群・霧ヶ鼻古墳群・谷尾谷古墳群を取り上げる。

大山墳墓群　I・J・L地点で、尾根上に連なる6基の台状墓とそれをとりまく29基の周



第2図　鉄製工具出土の墳墓・古墳(各文献から作成、スケール：同、方位：不同)
Y:鉇　T:刀子　O：斧　数値は個数を表示、数値のないものは1点

辺主体部が検出されている。当該時期としては、多量の副葬品を有する台状墓群であり、特定有力家族の累世的墳墓群[14]と考えられる。鉄製工具は、7号墓および、7基の周辺主体から鉇が出土している。大山墳墓群内での鉄製工具の出土状況で注意されるのは、最も豊富な副葬品を有し、整った墳丘を有する5号墓で鉄製工具の出土がみられないこと、鉄製工具を副葬する主体部が周辺主体に多いこと、鉄製工具は、鏃と共伴する例1、玉と共伴する例2、の他は単独で出土していることである。

帯城墳墓群　A地区では尾根上に連なる台状墓群(7～10号墓)が検出され、先端の7号墓の周辺第1主体部から鉇が出土している。7号墓には鉄剣を副葬する主体部が存在しており、その墳丘裾に位置する主体部からの出土である点に注意したい。また、B地区(11号墓)の南群第4主体部もやはり中心には位置していない。

内和田古墳群　5号墳は、一部の主体部を除き、古墳時代前期初頭に築かれた群集する主体部から構成され、帯城墳墓群のB地区と共通する性格を有している。鉄製工具は、中心主体を取り巻くように配置された主体部から出土している。

霧ケ鼻古墳群　2・3号墳では、中心主体に鉄製工具がみられるものの、墳丘規模の大きな5号墳では、土器棺墓にのみ鉄製工具が副葬されている。

谷尾谷古墳群　1号墳では、同一の墳丘内に中心主体である第1主体部が配置され、その左右に、第2・第3主体部が配されている。鉄製工具は、第2主体部で鉄鏃とともに副葬されており、第1主体部から鏡・剣、第3主体部からは刀が出土している。中心主体に鉄製工具を含まない点に注意したい。

大山墳墓群・帯城墳墓群・内和田古墳群・谷尾谷1号墳は、丹後と中丹波地域での鉄製工具副葬の初期段階であり、副葬の意義と被葬者像を知るうえで重要な意味を有している。これらに共通する特徴は、墳墓や古墳の中で中心的な位置を占める主体部には鉄製工具の副葬がみられず、それに接する、もしくは離れた場所の主体部に副葬されている点である。弥生時代後期の集団墓にみられる特徴として、副葬品が複数の主体で散的に副葬される傾向にあることはすでに指摘されているが[15]、鉄製工具のみを対象として検討した場合、相対的に条件の劣る位置に営まれていることが特徴的である[16]。この位置関係を積極的に評価すれば、墳墓を構成する共同体の中にあって、墳墓の中心を占有する最有力者は鉄製農工具を副葬の対象とせず、共同体を支える成員のうち、最有力者よりも下位の地位を有する成員が副葬の対象としたのではないかという推察が成り立つであろう。共同体のなかで、階層の分化が進み、それが埋葬での思想に反映されるようになった結果、鉄製工具を副葬する階層が出現したと考えたい。この階層は、共同体内において鉄製品を保有できたという点で有力な位置づけが可能であるものの、共同体内での最有力者ではないといえる。

さて、初期段階のこの特徴は、一部ではその後も継続していることが確認される。

普甲古墳群は、古墳時代中期の小規模古墳群であり、尾根上に7基の古墳が連なり構成されている。鉄製工具は、3号墳第4主体部から出土しており、中心主体から離れた墳丘裾に位置している。この様相は、鉄製農工具を副葬する主体部の古墳群内における在り方が初期段階と基本的に変わるところがない。古墳の立地・規模・成形技法等に共通性を見いだすことのできる中期の小規模古墳群[17]において、副葬の思想的背景についても継続する要素が認められる点は重要である。

以上の事例から、鉄製工具を副葬する被葬者について、弥生時代後期に始まる初期段階では、共同体の有力成員であること、この傾向は、一部では弥生時代の台状墓の系譜を引く古墳時代中期の小規模古墳群まで継続してみられることが確認できる。

主体部の配置によって導いたこの被葬者像に対し、次に視点を変えて鉄製工具そのものの性格からアプローチしたい。

鉄製工具出現の社会的意義は、木工加工技術の飛躍的発展をもたらしたことに求められよう[18]。峰山町古殿遺跡[19]から出土した多量の木製品は、高度な木工加工技術を裏付けるものであるし、なにより、これらの技術が木製農具の製作にも当然反映されたものと考えることができる。鉄製工具は、木製農具を含めた多種にわたる木製品の製作に対して多大な影響を及ぼし、農耕を含めた諸生産の発展に重要な役割を担ったといえる。そして、さらに重要な意義は、鉄製工具が鉄そのものの有する素材としての価値を日常生活のなかにあって始めて具現化した点に求められる。鉄製工具の出現は、物の製作における技術革新をもたらしたのみならず、鉄が共同体の維持・発展をうながす多大な可能性をもつことを認識させ得たと考えられる。したがって、鉄製工具は、共同体の財産としての性格を有することが可能であったといえる。

以上の理解にたてば、鉄製工具を副葬された被葬者が、共同体の財産である鉄製工具を管理・掌握した有力成員であり、共同体の実質的発展を担った有力者として、より具体的な姿を描くことができよう。

さて、鉄製工具を副葬する被葬者の性格をこのように考えれば、その思想的背景についても理解しやすい。つまり、鉄製工具が生産における技術革新をもたらしたことにより、鉄に対する特別な価値観が形成されたと考えられることである。ただし、これは鏡に代表されるような祭祀に関わると思われる一種の宝器とは、明らかに異なる価値観として区別されねばならない。そして、共同体のなかでこの鉄製工具を管理・掌握する有力成員が現れたことにより、有力成員に対しては、新たな価値観のもとで鉄製工具の副葬が行われたと考えられる。なお、棺内への副葬以前の段階で鉄製工具の副葬が共同体による儀礼的要

素を有していたことを示す事例として、広峯8号墳の埋納土壙[20]を提示しておきたい。

6　前方後円墳の成立と鉄製農具副葬の背景

弥生時代後期から始まる鉄製工具の副葬について、鉄製工具それ自体での副葬の思想的基盤と被葬者の階層的地位をみてきた。次に、鉄製農具と棺外および棺内副室副葬について述べていきたい。

弥生時代後期に鉄製工具の副葬が始まる段階では、鉄製工具は棺内に収められるのを通常とした(AⅠ型)。この段階では、木棺の木口部分を「H」型に組み合わせる形態がみられたが[21]、鉄製工具を被葬者と隔絶して副葬する事例はみられない。棺外に鉄製工具と農具を副葬する例(BⅢ型)は、丹後ではカジヤ古墳でみられ、AⅢ型の蛭子山1号墳とともに前期後半の築造と考えられる。鉄製工具と農具がセットをなし、棺内副室に副葬される例(BⅡ型)は、丹後では、作山1号墳、中丹波では、私市円山古墳を初源とし、ともにカジヤ古墳・蛭子山1号墳よりも後出する。これらの古墳は、完全な形ではないにせよいわゆる畿内型古墳[22]としての要素をもつものであり、鉄製工具と農具を棺外もしくは棺内副室に副葬するという思想は、従来の思想に対峙するという意味において畿内型古墳の影響下に成立したものと考えざるを得ない。

そこで、畿内での前期古墳の鉄製農工具副葬状況について筆者の見解を示したうえで、上記の点について検証することにしたい。

定形化した前方後円墳は、大和を中心とする諸勢力によってきわめて高度な政治的な意図のもとに成立をみる。前方後円墳を構成する諸要素は、各地の弥生墳丘墓のなかに存在し、それらを継承しつつも質的に転換させ、全国的な普遍性を有する墓制としての前方後円墳が創出される[23]。

前方後円墳の成立をこのように理解したうえで、改めてここで問題とする鉄製農工具について、その質的転換の現象に注目してみたい。前方後円墳の成立時に鉄製農工具が、副葬品目のひとつして採用されたことは確実であり、このときに鉄製農具と工具がセットをなす点は重要である。これ以前では北部九州において両者の副葬がみられるが、セットとなる例はなく、また、内容的にも刀子・鉇・斧といった工具が中心を占め、農具の割合はわずかにすぎない[24]。その他の地域では、鉄製工具の副葬はみられるものの、鉄製農具の副葬は確認されていない[25]。特に大和では、両者とも副葬の対象とはされていない[26]。このようにみると、鉄製農工具の副葬もまた前方後円墳の成立によって質的転換を遂げたといえ、なかでも鉄製農具が副葬品として加えられた点が重視される。

しかし、このことは逆に鉄製農具の副葬に対する思想的背景の未熟さをあわせもつとい

え、むしろ鉄製工具の副葬で形成されつつあった思想的基盤をもとに鉄製農具が追加されることにより質的転換が行われたものと考えられる。

この点は、初現期の前方後円墳である椿井大塚山古墳[27]に副葬された鉄製工具・農具・漁具によってもその裏付けが可能である。特に一般的にはあまりみられない漁具の存在に注目したい。この3点に共通することは、いずれも鉄器化することによって、その機能を格段に向上させたことであり、鉄の使用によってもたらされた生産性の増大を象徴しているといえる。これは前節で記したように、鉄製工具自身の副葬思想として確認してきたことと本質は同様である。つまり、椿井大塚山古墳では、鉄製工具に農具と漁具が追加されたものとみることが可能である。鉄による生産性の増大と、それらを掌握するという副葬の思想的背景のもとでは、漁具もまた農具と同様の意味をもつといえる。ただし、鉄製漁具については、普及の問題や儀礼的要素の希薄さ等から、一部の例を除き副葬の対象として定着しなかったものと考えたい[28]。

次に、棺外および棺内副室への副葬について考えてみよう。

寺沢氏の分類[29]によるⅠa型(4種以上の農工具を棺外に副葬する。ただし、小論での分類による棺内副室も含む。)では、古相の古墳と比較して後出の粘土槨をもつ古墳において農工具が一ヶ所に集中していく傾向が指摘されている。その際、後者はここでいう棺内副室に入れる形態を取ることが多い。つまり、小論での分類によるⅢ類(棺外)とⅡ類(棺内副室)は、Ⅲ類→Ⅱ類という変化として認識することが可能である。

また、前期古墳での副葬品配列を3段階に区分した今尾氏の見解[30]によれば、棺内副室への副葬品配列行為は、棺内への行為に連続して行われる。つまり、棺の蓋が閉じられる以前の状態(第1段階)での配列に含まれるものと判断される。したがって、棺外と比較して棺内副室への副葬は、葬送儀礼のなかでより重要な役割を果たすと思われる段階で鉄製農工具が使用されるに至ったことを示している。さらに、椿井大塚山古墳に後出する紫金山古墳や寺戸大塚古墳では、鉄製農工具の副葬行為が2回行われる副葬の反復性を有していることも指摘されている[31]。このように、鉄製農工具は、棺内副室への副葬と反復というふたつの方向性をもち、葬送儀礼の発展の過程のなかで確実にその相対的地位を高めていったことが認められよう。

前述のように、弥生時代後期では、共同体階層内で地位を反影する副葬品が定着化しつつあり、特に最有力者のその首長に対しては、鏡・玉を中心とした呪術的色彩の濃いものが選ばれたと考えられる。これは、そのまま首長の性格を示すものであるが、鉄製工具については、共同体内での有力成員が副葬の対象とした。前方後円墳の成立によって首長のための新たな副葬品体系が確立するが、すべての副葬品が同列に扱われたのではなく、鏡、

やや遅れて碧玉製腕飾類などの呪術的色彩の強いものがその中心的位置を占めた。これらは、葬送儀礼中、まず棺内へと副葬が行われた。鉄製農工具も鉄器による生産性の増大を象徴するものとして副葬が開始されたが、棺外への副葬であった。この差は、前方後円墳の成立以前にすでに定着していたそれぞれの副葬品に対する思想的背景を反映したものとして理解できる。つまり、鉄製農工具については、従来首長のための副葬品とされていなかったために、葬送儀礼中においても鏡等とは異なる取り扱いを受けたといえる。

この時点では、鉄製農工具に対する儀礼的要素は希薄であったと思われる。しかし、鉄製工具に農具が加わったことにより、農耕儀礼を背景としてその呪術的色彩を強めるに至ったと考えられる。つまり、鉄製農具の副葬開始が儀礼的要素を付加する契機となり、ひいては副葬に対する思想的背景が変容する要因となりえたと考えられる。この農耕儀礼の具体的内容は不明といわざるをえないが、可能性として農耕儀礼のひとつである食物供献による服属儀礼[32]のようなものを想定しておくことにしたい。いずれにせよ、葬送儀礼のなかで特別な役割が付与された結果、すなわち鉄製農工具の副葬に対して政治的背景が強化された結果、その副葬形態についても必然的に変化が求められ、棺内副室への副葬や反復という現象が生じたのであろう。

さて、再び論点を丹波北部の古墳に戻すため、次の点のみ再度確認をしておく。すなわち、鉄製工具と農具のセットによる副葬は、前方後円墳の成立による副葬品での質的変換として成立したものであること、棺外への副葬から、その後棺内副室への副葬がみられるようになることである。

この2点をもって、先に想定したBⅢ型およびBⅡ型の古墳が畿内型古墳の影響下に成立したとする根拠としうるだろう。AⅠ型とは異なり、これらは明かな政治的背景を有して導入された副葬形態として区別されねばならない。なお、棺内に鉄製工具と農具を副葬するBⅠ型については、BⅢ型・BⅡ型の出現以降にAⅠ型との折衷型として出現したと考えられる。また、当地域と類似した現象は、東国地域の古墳でも確認することができる[33]ことから、さらに他地域でも認めうる可能性が指摘できる。

7　おわりに　―私市円山古墳第3主体部の評価―

私市円山古墳の第3主体部は、第1・2主体部と比して、墓壙の規模・副葬品の内容とも劣っており、棺の形態・墓壙の主軸とも明らかに異なるなど、きわめて異質な性格を有している。副葬品は、鉄鏃と鉄製農工具を中心として構成される。

鉄製農工具の出土を手がかりに、これまでの考察の結果を踏まえて次のように考えたい。すなわち、第3主体部の被葬者は、第2主体部の被葬者と同一の共同体に属する有力な成

員であり、墳頂部での埋葬を許されるほどの高い地位を有していた。第2主体部では、政治色の強い画一的な農工具の副葬(BⅡ型)が行われるのに対して、第3主体部の被葬者の埋葬に際しては、鉄製農具を含むものの、伝統的な思想に基づき鉄製農工具を棺内へ副葬(BⅠ型)したと。つまり、同じ鉄製農工具の副葬でありながらもその思想的・政治的背景は大きく異なるものである。

私市円山古墳のこの埋葬形態は、前方後円墳を頂点とする画一化した葬送儀礼が首長のみに限定されていること、首長の属する共同体の有力成員にあっても、従来の埋葬が行われていることを示している。第2節で明らかにしたように、鉄製農工具の副葬は幅広い階層にわたっているが、これは成立の背景が異なる副葬形態が同時に存在したためと考えることができよう。

私市円山古墳の第3主体部について以上のような評価を与え、小論を終えたい。

なお、小論をなすにあたり、多くの方々から有益な御意見・御教授を受けた。記して厚く感謝したいと思う。(50音順、敬称略)

阿部真・石崎善久・磯野浩光・大崎哲人・小川正純・杉原和雄・高野陽子・都出比呂志・土橋誠・松村隆文・森正・森下衛・和田萃

(なべた・いさむ=(財)大阪府埋蔵文化財協会)

1　文献23、本書p.110～113参照。

2　以下に記した論文の他、注5・7・13・18等の論文に代表される。
都出比呂志「農具鉄器化の諸段階」(同『日本農耕社会の成立過程』岩波書店)　1989
松井和幸「日本古代の鉄製鍬先・鋤先について」(『考古学雑誌』72-3)　1989
古瀬清秀「古墳時代鉄製工具の研究―短冊形鉄斧を中心として―」(『考古学雑誌』60-2)　1977
岡村秀典「鉄製工具」(『弥生文化の研究』5道具と技術Ⅰ　雄山閣)　1985

3　小林行雄『古墳時代の研究』(青木書店)　1961

4　春成秀爾「前方後円墳論」(『東アジア社会における日本古代史講座』2倭国の形成と古墳文化　学生社)　1984

5　原島礼二『日本古代社会の基礎構造』(未来社)　1968

6　寺沢知子「鉄製農工具副葬の意義」(『橿原考古学研究所論集』4　吉川弘文館)　1979

7　田辺昭三「生産力発展の諸段階〈弥生式時代における鉄器をめぐって〉」(『私たちの考古学』11)　1956

8　寺沢氏の示された要素のうち、「形態」については今回特には取り上げていない。それは、小論の主たる目的が、はじめに述べたように、個々の遺物の形態差及び時期差を問題とするのではないことによるが、何よりも、鉄製農工具の形態差が直接的に思想的背景の差として表出しないとの理解による。鉄製農工具のうち、鎌及び鍬・鋤先については、古墳時代中期頃、形態上の変革とともに農業生産体系に大きな画期をもたらすが(都出、前掲注2)、古墳への副葬は、大阪府野中アリ山古墳・奈良県大和4号墳の例によって、新旧の形態が併存し、

副葬に対する思想的背景に変化のなかったことを示している。他の鉄製農工具は、総じて変化が乏しく、特に形態差を問題とする必要はないであろう。ただし、中期に始まるいわゆるミニチュアの存在は、ある意味で「形態差」であり、ここで触れておきたい。寺沢氏がすでに指摘されたように、ミニチュアの副葬状況は、基本的にそれまでのものと何ら変化はなく、副葬の意義そのものは継続している(寺沢、前掲注6)といえ、この点は、当地域でも確認することができる(小虫1号墳、私市円山古墳)。つまり、ミニチュア化という形態上の変化は、副葬の意義そのものの変化に伴うものではない。ミニチュアの出現は、副葬のために特別に製作された点をこそ重視すべきであり、それは、葬送儀礼の中で、鉄製農工具の副葬が、重要な位置を確立していたことを示している。仮説を提示すれば、前期段階で、大和王権と各地域の首長層との間で成立したいわば確立した葬送儀礼を、より階層の低い首長層へと拡大するにあたり、多量の副葬用の鉄製農工具が必要とされた。この新たな需要に対して、大和王権の指揮下において、個体あたりの材料を節約したミニチュアが製作されたと考える。換言すれば、ミニチュアの出現は、政治的背景の変化を主たる要因とするものであり、この現象をもって儀礼の形骸化を示すものではないといえる。

9　横穴式石室から出土した鉄製農工具は、小論の方法論による検討が行えないため、対象から除いた。したがって、それ以外の埋葬施設も含め、横穴式石室採用以後のいわゆる古墳時代後期(2期区分による)については、今後の検討課題としておく。

10　作山10号墳は、前期末築造の作山1号墳を取り囲むように作られた木棺墓・土壙墓等のひとつであり、首長墳と墓域を共有している。単純に首長と共同体の成員という図式で捉えるならば弥生時代後期から古墳時代中期への過渡期の様相とみることも可能である。つまり、首長が傑出した古墳に埋葬されながら、共同体の墓域から離脱しきれていない段階といえる。ただし、台状墓と小規模古墳群が、丘陵上に墓域を占有している他の墳墓、古墳群での状況とは明らかに異なっており、やや特異な事例として考えておく。

11　平良泰久「国家形成期の日本海」「丹後」(『歴史公論』No.88　雄山閣)　1983

12　蛭子山1号墳は、昭和4年の調査で石棺内外の副葬品が確認された。棺外副葬品は、石棺発見の3日後、佐藤臨時委員によって検出されさらに、昭和60年の再調査時においてその残片が確認された。これらの報告中に鉄製農具は見い出せないが、同時に出土した刀剣類が残缺している点等から、盗掘の可能性が指摘されていることを留意しておきたい。ただし石棺内の副葬品(鏡1面、鉄刀1口)については、出土状況および遺物の遺存状況から、盗掘は受けていないと判断すべきであろう。

13　橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題―福岡県吉ヶ浦遺跡出土の鉄器を中心にして―」(『考古学雑誌』60-1)　1974

14　大山墳墓群を特定有力家族の累世的墳墓とみる点については、報告者である平良泰久・黒田恭正・常盤井智行各氏の見解(文献1)を支持する。

15　北篠芳隆「古墳成立期における地域間の相互作用」(『考古学研究』37-2)　1990

16　本節では、鉄製工具を考察の対象としたため、他の鉄製品(刀・剣・鏃等)や鏡・玉類を副葬する主体部との関連については検討が行えていない。これらについては、別稿にて検討の予定である。

17　久保哲正「丹後地域における弥生墓の展開」(『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ)　1988

18　近藤義郎「鉄製工具の出現」(『世界考古学大系』2　日本Ⅱ)　1960

19　平良泰久ほか「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1978

鍋田勇ほか『古殿遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第9冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

20　埋納土壙は、広峯8号墳の墳丘裾テラスにあり、1.2×1.2m、深さ0.4mの隅丸方形を呈する。土壙の中・下層で鉄製工具と砥石が、上層で土師器高杯が検出されている。共同体の葬送儀礼によって高杯とともに鉄製工具が供献されたと考えられる。時期的には、布留式の中段階であり、大山墳墓群や帯城墳墓群よりも時期が下るものの、広峯・寺ノ段古墳群の中では、棺内への副葬が一般化する前段階とされ、その意味では、被葬者の所有権が確立する直前の形態として捉えることが可能であろう(文献21)。

21　福永伸哉「木棺墓」(『弥生文化の研究』8　祭と墓と装い　雄山閣)　1987
大山墳墓群では、福永氏の分類によるⅠ型の組合式箱形木棺が主流を占めている。組合式箱形木棺で副室構造をもつ例は、棺材の組合せにおけるA型(両側板が小口板を挟んで棺長軸方向に突出するもの)を朔形とする可能性があり、割竹型木棺での副室とは構造上はもとより、系譜も異なると考えられる。

22　小田富士雄「畿内型古墳の伝播」(『古代の日本』3・九州)　1970
当地域では、古墳時代前～中期の古墳に対し、台状墓の系譜をひく在地色の強い古墳と識別する意味において畿内型古墳の概念を適用することを有効な手段と考える。ただし、墳形・外表施設・内部構造・副葬品等、畿内型古墳のすべての要素をみたす古墳は当地域にはなく、そのため、小論では規制を緩めて使用している。

23　近藤義郎「前方後円墳の誕生」(『岩波講座日本考古学』6変化と画期)　1986

24　北部九州の資料は、『早良王墓とその時代』(福岡市立歴史資料館、1986)所収の「北部九州の副葬品をもつ弥生時代墳墓地名表」を参照した。

25　吉備では、辻山田土壙群・鋳物師谷墳墓群・中山墳墓群等、多数の墳墓において、鉄製工具の副葬がみられるものの、鉄製農具は含まれていない。

26　大和では、弥生後期の墳墓について不明な点が多く、現状での速断は謹むべきかもしれないが一般的に、畿内の弥生墳墓の副葬品がきわめて少量であることから、小論では、前方後円墳の成立以前に、鉄製農工具の副葬はなかったと理解しておく。

27　『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』第3集　山城町教育委員会)　1980

28　山中英彦「鉄製漁撈具出土の古墳について」(『古代探叢』早稲田大学出版部)　1980
山中氏は、鉄製漁具の出土の多い地域として畿内・吉備・関門の三地域がみとめられるとしこのうち畿内については、前～中期の大型首長墳の副葬品とされていることから、首長による海人集団の統割を意味するものと評価した。この段階で、組織化した海人集団を想定することには疑問が残るが、傾聴すべき見解であろう。特に、前期において漁具の副葬が首長墳に限られていることは、重要な点であり、前方後円墳の成立にあたり、鉄製農具同様、その副葬品目に加えられたことを示していると考えられる。そして、これらが、従来の漁具ではなく、鉄製品であることにこそ副葬品とされた主たる要因を求めるべきであろう。

29　注6と同じ

30　今尾文昭「古墳祭祀の画一性と非画一性―前期古墳の副葬品配列から考える―」(『橿原考古学研究所論集』第6　吉川弘文館)　1984

31　副葬の反復性は、鉄製農工具とともに鉄製武器についても指摘されている。今尾氏のこの指摘は重要であり、中期古墳にみられる多量の鉄製武器および鉄製農工具の副葬が、数次にわたる儀礼の集積とみる寺沢氏の見解を補強しうるものといえる。すなわち、儀礼の反復という行為が前期段階ですでに開始され、その発展した状態として、中期古墳の多量副葬を理解することができると考えられる。

32　鉄製農工具が副葬品として存在する以上、葬送儀礼の中でこれらに何らかの意味が備わっていたことは確実である。しかし、本文で記したように、鉄製工具の副葬が開始される段階ではそれを管理・掌握する有力成員の出現を契機とし、鉄製工具を使用した儀礼は想定できない。つまり、葬送儀礼においても、その副葬に所作を伴う儀礼はなかったと考えられる。前方後円墳の成立時に、農具を含め、飛躍した状況での副葬が開始されるが、この段階でも基本的には、首長の鉄の掌握という意味で理解しており、やはり葬送儀礼中、農耕儀礼を背景として、所作が伴ったとは考えにくい。

民俗例の中に春の予祝や秋の収穫祭等、日常の農耕儀礼の中で実際に鉄製農具を使用した儀礼が存在することから、鉄製農工具が、葬送儀礼の中で所作を伴う可能性も一概に否定できないが、それを古墳時代まで遡らすことができるか、さらに、鉄製農工具の副葬時での儀礼と農耕儀礼を同一視することが可能か等、考古学的方法論では解決困難な問題が多い。

以上の点を踏まえたうえで、仮説として私見を述べたい。

大和王権は、地域連合という成立基盤に立ちながらも相対的に畿内の勢力強化という進展をみせ、各地域首長に対しては、支配・服属の図式を整えていく。この服属に伴う儀礼として、岡田氏の示される初穂の供献儀礼(岡田精司「大化前代の服属儀礼」同『古代王権の祭祀と神話』所収　1970)が取り行われるようになる。この農耕儀礼に基づいた服属儀礼は、毎年繰り返されることにより、後にオスクニ儀礼といった確立したものへと進んでいく。この儀礼の存在は、大和王権と各地域首長が農耕儀礼を通じて支配・服属の関係を結んでいること、及び儀礼の定期性を有していることで特に注目される。もちろん鉄製農工具が、こうした儀礼で直接使用されたと考えるのではないが、地域首長が初穂を貢納するという一方的な従属関係のみにあったのではなく、この際に生産性に大きく影響を与える鉄製農工具が、大和王権から地域首長に分配されたのではないかと想定したい。つまり、鉄を掌握していた大和王権は、鉄製農工具を地域首長に分配することにより、従属の関係を維持することが可能となり、地域首長にとっては、地域の発展と自らの地位の安定を図ることができたといえるのではないか。このような政治的背景を想定すれば、鉄製農工具は、間接的に農耕儀礼と結びつくといえ、古墳への副葬に対しても、この服属儀礼が反映されたものとして理解が可能となろう。

33　岩崎卓也「鉄製鍬・鋤の周辺」(『日本史の黎明―八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』　六興出版)　1985

岩崎氏は、主たる論点として、東国での鉄製鍬・鋤先の重要度の低さ及び保有量の少なさを主張しながら、前期の大首長墓にみられた鍬・鋤先の副葬が中期になると中・小古墳に移行する事例をもって、新たに浮上してきた階層(中・小豪族)への農具集中主体の変化を見い出そうとするなど、やや矛盾するとも思える見解を示されている。東国における鍬・鋤先の保有量の少なさは、原島説への批判(土井義夫「鉄製農工具研究ノート」『どるめん』10　1976)にもみられるように、肯定すべき状況と考えられるが、こうした社会的背景をもちながら、古墳への副葬が行われていることこそ注意されなければならない。

関東地方での鉄製農具出土古墳は、最古段階で茨城県原1号墳・栃木県那須八幡塚という前方後方墳、前期末で神奈川県白山古墳・茨城県鏡塚古墳という前方後円墳で確認され、前者は鎌を、後者は鎌と鍬・鋤先を有する。

畿内の古墳において前期では鎌に関心があり、中期では鍬・鋤先を重視する傾向が強まるという岩崎氏の指摘を、農具副葬の段階的現象と理解すれば、上記の状況は、畿内型古墳における農具副葬の状況をそのまま反映したものとして捉えることができよう。最古段階の前方後円墳の成立時期は微妙な段階とはいえるが、いずれにせよ、いわゆる畿内型古墳の出現に

より、農具の副葬が開始されると理解しておきたい。東国での鉄製農具の副葬は、前方後円墳における葬送儀礼の影響下で行われるものであり、保有量の少なさにもかかわらず副葬が行われている点は、首長の葬送儀礼にとって必要な品目として意識される思想的背景が存在したためと考えられる。こうした地域に少量とはいえ、鉄製農具がもたらされる経緯については、注32を参照されたい。

〈文　献〉

1　平良泰久・黒田恭正・常盤井智行ほか『丹後大山墳墓群』(『京都府丹後町文化財調査報告書』第1集　丹後町教育委員会)　1983

2　梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第20冊・『京都府文化財調査報告』第21冊)　1940・1955

3　森正「普甲古墳群・稲荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

4　三好博喜「ゲンギョウの山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

5　坪倉利正・杉原和雄ほか『カジヤ古墳発掘調査報告書』(峰山町教育委員会)　1972

6　岡田晃治ほか「帯城墳墓群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1987

7　久保哲正ほか『大内1号墳発掘調査概報』(『大宮町文化財調査報告』第2集　大宮町教育委員会)　1983

8　奥村清一郎ほか『大谷古墳』(『大宮町文化財調査報告』第4集　大宮町教育委員会)　1987

9　鈴木忠司・植山茂ほか『小池古墳群』(『大宮町文化財調査報告』第3集　大宮町教育委員会・(財)古代學協會・平安博物館)　1984

10　岡田晃治ほか「日ノ内古墳」(『京都府岩滝町文化財調査報告』第7集　弓木城跡・千原遺跡　岩滝町教育委員会)　1985

11　中嶌陽太郎・下川賢司『霧ヶ鼻古墳群発掘調査概要』(『宮津市文化財調査報告』第18集　宮津市教育委員会)　1990

12　「内和田古墳群」((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　現地説明会資料No. 90-06)　1990

13　梅原末治「桑飼村蛭子山、作り山両古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第12冊・第14冊)　1931・1933

14　佐藤晃一・細川修平『蛭子山古墳』(『加悦町文化財調査概要』4　加悦町教育委員会)　1985

15　「史跡作山古墳発掘調査　現地説明会資料」(加悦町教育委員会)　1989

16　堤圭三郎「愛宕山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)　1966

17　佐藤晃一ほか『小虫古墳群』(『加悦町文化財調査概要』3　加悦町教育委員会)　1985

18　増田孝彦・竹原一彦ほか『豊富谷丘陵遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

19　堤圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会)　1967

20　竹原一彦「ヌクモ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990

21　崎山正人ほか『駅南地区発掘調査報告書』(『福知山市文化財調査報告書』第16集　福知山市教育委員会)　1989

22　平良泰久「八ヶ谷古墳」(『丹波の古墳』Ⅰ　山城考古学研究会)　1983
23　鍋田勇・石崎善久・高野陽子ほか「私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989
24　岩田実『荒神塚古墳調査報告』(『綾部史談考古資料集』第２輯　綾部史談会)　1962

〔追記〕

脱稿後、関川尚功「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」(『文化史論叢』上　横田健一先生古稀記念　創元社　1987)を入手した。関川氏は、古墳出土農工具の組成を検討し、「皇太神宮儀式帳」「止由気宮儀式帳」にみられる農工具や養老律令中の「軍防令」にみられる農工具との関連性を指摘することによって、農工具が副葬される理由が必ずしも特定要因に限定されないとの見解を提示する。関川氏の指摘のうち、後者については、当地域でも武器との共伴例が多く、傾聴すべきものと思われるが、前者については、伊勢神宮の成立を雄略朝とするのがほぼ定説なっていること、及び神宮での祭祀と古墳での葬送儀礼は異なる性格をもつと考えられることから、その直接的な関連は認め難い。むしろ、これらに共通性が認められるのは、農耕儀礼としての関わり(注32参照)から説明できるものと考える。